住環境財団
2023年度助成金
事業報告書

事業名

「アジアにおけるサステナビリティ・イノベーションの接続」

公益財団法人 国際文化会館

1. 事業名

アジアにおけるサステナビリティ・イノベーションの接続

2. 実施団体名、責任者名

公益財団法人国際文化会館
常務理事（代表理事）　神保謙

事業担当者　プログラム・オフィサー　五月女卓人

3. 事業の目的

著しく変化するグローバル、そしてアジア情勢の中、気候変動と環境インパクトに基づくアジアの持続可能な成長のテーマを効果的に探究するべく、関連領域のイノベーションリーダーに一層クローズアップする会議イベントを開催する。

東南アジア・南アジア新興国では人口ボーナスと中間所得層の増加に伴い、著しい経済成長が見込まれる一方で、社会課題解決と持続可能な成長をけん引するイノベーションが各領域で生まれている。特に経済成長がもたらす環境への影響は大きく、エネルギートランジションを含めた気候テック（車の電動化含む）やサーキュラーエコノミーの領域でアジアから生まれるサステナビリティ関連のイノベーションを積極的に取り上げ、いかに持続可能な成長を果たすかの議論は、アジア新興国における命題である。

一方、サステナビリティや気候変動対策は欧米先進国が議論をけん引しており、アジア新興国の情勢（アジアセントリックな思考）が勘案されないことが多い。実際にはアジア新興国が直面する環境課題を視野に、次のトップリーダーとなるイノベーションリーダーがあらゆる領域で成果を出し躍進しており、5-10 年後には世界の中でもアジアを代表し、先進的な発想を持ったトップリーダーが多く台頭すると見込まれる。

アジアのリーダー達が、イノベーションによって世界をけん引するための重要な要素として、各イノベーションリーダーが、アジア他国や他領域で同じく先進的な取組やイノベーションを起こしているリーダーと深い信頼関係を築いた上で、パン・アジアでサステナビリティの課題解決に取り組む求心力が不可欠と考える。イノベーションリーダーが一同に会して、各領域の最もエッジが効いたアイデアとイノベーションを高い信頼の基盤の上で探求し、連携機会を高めていく活動が重要と考える。

4. 事業の概要

本会議イベントは、2023 年 12 月にアジア各国のイノベーションリーダー24 名を日本（軽井沢・東京）に招聘して、三日間に亘って開催した。①関連する分野が多岐に亘る、②課題解決のためには、技術革新・イノベーションに対する投資がカギであり、その担い手である起業家の役割が決定的に重要、③産官学の連携が不可欠―との観点から、様々な分野の有識者・専門家・起業家・政策当局者が一同に会して議論する場を設けた。

初回の会議イベントとして、参加者の深い信頼関係の構築をまずは主眼に、多国籍・多文化の政策討論に精通したファシリテーターも招聘し、各国の抱える環境問題などを含む幅広いテーマを設定・議論した。また、アジアのイノベーションリーダー24 名での二日間の議論に加え、最終日には日本の国会議員や政策当局者含むイノベーションリーダーとの交流の場を設け、パネルセッションや意見交換会を開催した。

5. ウェブサイト上での公開（開催報告）

日：https://apinitiative.org/2024/02/05/53959/

英：https://apinitiative.org/en/2024/02/05/54742/

6. 事業の成果と今後の課題

まず、一番の成果としては今回の会議イベントに参加した人々が深い信頼関係を築き、将来的なコラボレーションの土台が構築できたことが挙げられる。サステナビリティの向上・環境問題の解決には、様々な分野の知見を組み合わせ、サステナビリティ・イノベーションを接続することが一つの鍵となるが、今回はあらゆる領域で活躍し、強いリーダーシップ、及びテクノロジーを有し、社会的インパクトを起こすことができるチェンジメーカー24 名を繋ぎ合わせることができた。実際に議論の過程で、参加者の一人から、具体的にインドネシアでの野焼きによる大規模火災や煙害などの課題に参加者間で協働して解決に取り組みたいと、コラボレーションの可能性が示された。

その他にも、竹の建築素材としての機能性・汎用性に着目し、革新的な建築を手掛けるインドネシアの実業家からは、工芸とテクノロジーを繋いでいく新たな建築についての提案があった。彼女が竹を使ってつくる構造物は、構造美とサステナビリティ―を両立するものであるが、更に IT やテクノロジーとの融合を図りたいというものだった。参加者からは、デザイン思考（Design Thinking）は、「イノベーションを生み出す人間中心のアプローチ」であり、革新的なプロダクトを生む可能性があるという意見も出され、自然と IT との共生デザインのプロジェクト化に賛同する声が多く挙がった。

また、地球の環境問題解決につながるテクノロジーは、バイオロジーやサイエンスの世界から生まれてくるはずだという意見もあり、科学者を幅広く支援するプロジェクトについての提案もあった。時に科学者に起業家精神を植え付けたり、必要な人材同士のマッチングを進めたりすることで、埋もれていた技術そして英知を世の中に出していきたいというこの提案へも多くの支援の声が挙った。

ベンチャーキャピタル経営者や投資家からはクライメート・トランジションやエネルギー・トランジション、グリーンファイナンスなどの取り組みが共有された。気候変動に対しては金融面でのアプローチに加え、資金援助に留まらず気候技術とビジネスをつなぎ合わせる活動の重要性なども唱えられた。

本会議イベントは第一回目、且つあらゆる分野のイノベーションリーダーを招聘したことから、お互いのバックグラウンドの共有や信頼関係の構築に時間を要したが、次回以降はより具体的なアイデアやコラボレーションの可能性にフォーカスして参りたい。
本会議イベントは、年一回、アジアの各都市にてローテーション開催を検討しており、今後も継続的に議論を深める。上記で挙がったアイデアの深化・コラボレーションの実現に取り組んでいくとともに、環境問題に対するアジア発の新たなソリューション創出に挑戦してゆく。

以上